

こえび類 (アカエビ、サルエビ、サケエビ、クダヒゲエビ等)



こえび類を構成する主なえび類. 1: アカエビ、2: ミゾトラエビ、3: ツノソリアカエビ、4: キシエビ、5: ミナミシロエビ、6: シロエビ、7: シナアカエビ、8: シラガサルエビ、9: オキサルエビ、10: ツルギサケエビ、11: コウダカクダヒゲエビ、12: ヒゲナガクダヒゲエビ

「こえび類」とは、底びき網で漁獲される小型えび類をまとめたもので、いろいろな種類が含まれています。そのほとんどがクルマエビ科とクダヒゲエビ科で、これらはイセエビなどのお腹に卵を抱くことはなく、受精卵を直接海中に放出します。通常、から揚げ、かき揚げの材料として用いられる他、活や冷凍で釣餌としても利用され

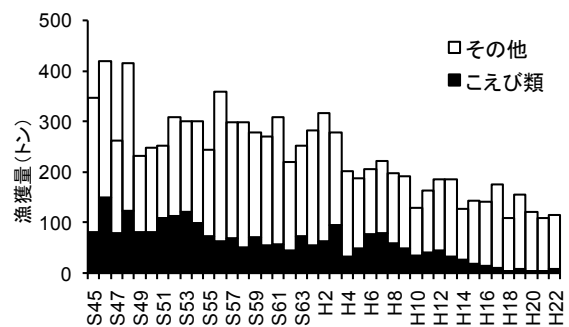


図1 高知市沖小型底びき網によるこえび類漁獲量の推移 (昭和45年~平成22年).

ています。こえび類は高知市沖の小型底びき網漁獲量の20～40%（40年間の平均は25%、最近5年は3～6%）を占める大切な資源です（図1）。

生物特性

高知市沖の小型底びき網で漁獲されるこえび類については、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所高知庁舎が詳しく調べています。その結果によると、こえび類の分布は水深で大きく分かれていて、水深10～30mはキシエビ、ツノソリアカエビ、シラガサルエビが、水深30～50mはアカエビが、水深40～70mはシナアカエビが優占します。しかし、こえび資源は大きく変動していて、近年、非常に多かったアカエビは姿を消し、資源量も減少していること（後述）が明らかにされています（表1、図2）。

資源動向

資源変動は種ごとに違うことから、資源動向は種ごとに分けて考える必要がありますが、こえび類の種別の情報は少ないため、こえび類全体をまとめて検討しました。長期的にデータが得られている高知市沖の漁獲効率は減少傾向にあります。平成18年(2006年)以降は安定しています(図2)。このことから、高知市沖こえび類の資源水準は「低位」、動向は「横ばい」と判断されます。

県内の漁獲

小型底びき網漁場3地区で漁獲されたこえび類を調査した結果、種組成は場所ごとに異なっていました(表1)。これは、漁場水深が高知市沖では20～70m、須崎市沖では50～70m、黒潮町沖では70～100mと異なるためです。月別の漁獲量は秋～春に少なくなりますが(図3)、これは産卵や寿命を含むえび類の生態と禁漁期(高知市沖：1～3月、須崎市沖：1～5月、黒潮町沖：8～9月の一部)が関係しています。

表1 各小型底びき網漁場で平成23年に漁獲されたこえび類の種組成.

場所	高知市沖 (御登瀬)		須崎市沖 (須崎)		黒潮町沖 (佐賀)	
	5/20	8/12	5/16	7/1	8/19	5/18 6/30
アカエビ属	アカエビ	1	15	26	33	
	ミマセアカエビ	1	1	21	9	8
	ミノトラエビ	62		3	7	
	ツノソリアカエビ	332	180			
	キシエビ	200				
	モギエビ	5				
	トラエビ					7
シナアカエビ属	シナアカエビ		75	166	1	178 152
	ミナシロエビ					5 13
	オキサルエビ			172	86	2
サルエビ属	ナンセイサルエビ	3		1	1	
	シラガサルエビ	12	107			7
サケエビ属	トゲサケエビ					11 91
	ツルギサケエビ					115 54
クダヒゲエビ属	ヒゲナガクダヒゲエビ			11	27	3 233 135
	コウダクダヒゲエビ			27	13	
ヨシエビ属	ヨシエビ					1
計	616	288	325	336	61	542 445

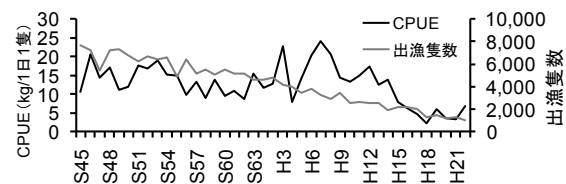


図2 高知市沖小型底びき網の漁獲努力量とこえび類漁獲効率の推移(昭和45年～平成22年).

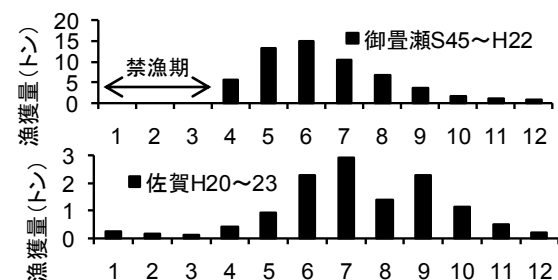


図3 高知市沖(上)及び黒潮町沖(佐賀、下)の小型底びき網によるこえび類の月別漁獲量.